展 景

季 刊

No.99

Autumn 2020

季刊　展景 99号

目次

マスク〈短歌〉……市川茂子　4
公園〈短歌〉……小野澤繁雄　6
曾祖母代理〈短歌〉……河村郁子　8
うつむかず〈俳句〉……新野祐子　10
遺品整理〈短歌〉……布宮慈子　12
〈那須通信 44〉キルトの効用……加藤文子　14
〈薫風颯々 19〉未知のコロナに翻弄されて……神村ふじを　20
対詠　ごきげんいかが？　PART 75……小野澤／布宮／河村　24
前号作品短評A……26
前号作品短評B……29
無二の会短信……32
編集後記……36

今号のイメージ／トウモロコシ

マスク

市川茂子

訪(と)い来るも行くもならずに巣ごもりのコロナ自粛はいつまでつづく

路地に入り塀より見ゆる新緑の木々のひともと山法師の花

帰り来て消毒スプレー自らにふりかけはじむ目を閉じながら

知り合いにマスク作りを頼まれぬ持参の布の見する人柄

マスク作りの見本を持ちて人は来るコロナ感染はげしくなりて

さまざまな形のマスクする人らテレビに映るをじっと見ている

大雨にコロナは流れ失せよとぞ明日の晴れを願うばかりに

たわいなき夢より覚めて起き上り感染の数でまた夜が明ける

留守の間に採りたての茗荷届きたり変らぬ友のまごころも受く

夕空に茜の雲の流れゆく事無きひと日しみじみ見上ぐ

公園

小野澤繁雄

身の丈にあった大きさ鯉のぼり風あれば吹かれベランダにあり
少年と父ともサイクリストか連休の初日朝を緑道にみる
みちなりにバラバラときて沼のべに一家族なる後尾お兄ちゃん
行動制限は犬にもおよびこの期間メグちゃんにあわぬ園の年寄りら

二人で一人というようなやりとりもスーパーに年寄り二人少しみている
今日きては庭にいるチャボ小屋を出されてすぐかかたまって
岸のべは寄り波よりて大沼に身(からだ)もわれを囲むものかな
すいれんの今年の花をみたことでことし半ばは終わるとおもう
わすれものというよりバット置き物か毎日が園に少年ら出て
社員寮がグループホームになりていつ長い時間をだれかも生きて

曾祖母代理

河村郁子

朝なさなスマホのアプリ「みてね」見て七か月児と笑顔を交はす

亡き姉の曾孫なれども妹の吾が代理の曾婆(ひいばば)役なり

身に覚えなきまま呼ばるる「ひいばあちゃん」代理を付けて先づは諾(うべな)ふ

コロナ禍ゆゑ七か月経たる初対面に曾爺さんは満面笑まふ

待ちまちて曾孫を抱く曾祖父は九十六歳　瞳潤ます

曾孫の名は寛翔(かんと)なり　エマニエルとミドルネームに付けたくなりぬ

誕生より写真に動画送りくれ成育が照らす非常時の日日

チャンスとてスマホ向ければにつこりと目線を向けてお坐りただす

父さんに真似ておもちやのキーボード触れる手つきは一人前なり

世に言ふは「親ばか」なれどもはや吾ひいばばばかになりにけるかも

うつむかず

新野（にいの）祐子

隠沼（こもりぬ）をルーペでさがす呉夫の忌

＊眞鍋呉夫……作家、俳人。二〇一二年六月五日、九十二歳にて他界。

ふくろうが梅雨の小径に立っていた

気に病めばわたしの中に梅雨茸

梅雨晴れ間オナガのかよう路ひかる

猫の真似ことごとく無理髪洗う

磐梯山山行五句

昼暗き森を点してくるまゆり

磐梯山（ばんだい）の科の木や美し大暑なり

夏うぐいす関西弁が道尋ぬ

コル続く羽ばたき強き揚羽蝶

えぞにうやコロナ禍といえうつむかず

遺品整理

布宮慈子（やすこ）

疫病と寒暑を避けて母の家（へ）の遺品整理はいまだ進まず

形見分けせむとて二人の叔母呼べば一人のマスクいやに分厚い

これ以後はわれ一人にて片づけむ写真の母はふつくらとして

香港に行つたといふはまことなり母の赤きパスポート出で来（く）

香港へ社員旅行とて行きたるはバブルのころか中年の母

友人と母はツアーに参加して秩父三十四箇所札所を巡りき

山形ゆ埼玉秩父の札所へとタクシーで行く企画はありき

川下り楽しさうなり長瀞の岩のあひだの母たちの舟

離（さか）り住むころは知らざる好物の赤飯供ふ遺影の前に

空間のあれば物あり田舎家に付きゐる小屋は魑魅魍魎ぞ

〈那須通信 44〉

キルトの効用

加藤文子

仕事の合間、父の残したハンカチーフを数枚重ねて糸の色を変えながら刺し子のように縫っている。

ただひたすら正方形の面に針を刺す。手を止めるのも、つづきをするのも容易にできる。しかもハンカチーフは場所もとらない。単純で気楽なのが良い。

昨年から自宅で週末三日間だけのギャラリーを開設した。その際、手伝いに来てくれる姪(めい)が来客のいない時に退屈しないでやれるのでは……と、ギャラリストのKさんがご提案下さったのがはじめるきっかけだった。

姪はそれほど興味を示さなかったが、私の方がおもしろくなってしまったのだった。

針仕事もライフワークにしているKさんによると、これをラリーキルトと言うのだそう。インドやパキスタン、バングラデシュなど、中央アジアで長いあいだ受け継がれてきたハンドス

テッチ。古くなったサリーや端切れなどを組み合わせてリメイクする。色彩も構成も自由で独創性に富んでいる。ステッチされたパーツをさらに繋げていけば、ベッドカバーにだってなる。

私のしているのは、縫い目も不揃いで未熟でささやかなもの。ラリーキルトの仲間に入れてもらえるのかどうか疑問もあるが、引き出しの中で長いこと眠っていたハンカチーフに糸が通ってあたらしい存在となって登場するのはうれしい。

刺し子をすることで布と布のあいだに空気が含まれて、適度な軽やかさもありながら、ちょうど良い具合にまとわりついて、物を覆った時にずれ落ちることがない。

はじめて仕上げたハンカチーフのキルトは、就寝時までのあいだの空の湯たんぽの容器の上にかけている。味気ないプラスチック製の容器をキルトで覆うだけで室内の風景も変わる。窓から光が射し込むと、糸の畝が虹のように浮き出てくる。

重ねた布にひと畝、またひと畝刺し込んでフィールドをうめていく。

たとえばこんなふう……。

赤い糸を数列ステッチしたあとは、赤茶色の糸に移行。縫っているうちに、次はグリーンにしようと思いつく。

キレイな色の流れにするには、赤茶色のパーツを充実させる必要がある。なのにひとたび思いつくと、赤茶色を飛び越えて早くグリーンの畝を見たくなって気が急いてくる。

おかげで指に針を刺してしまったり、糸が絡んでダマになったり、ラインが乱れたりと脱線する。

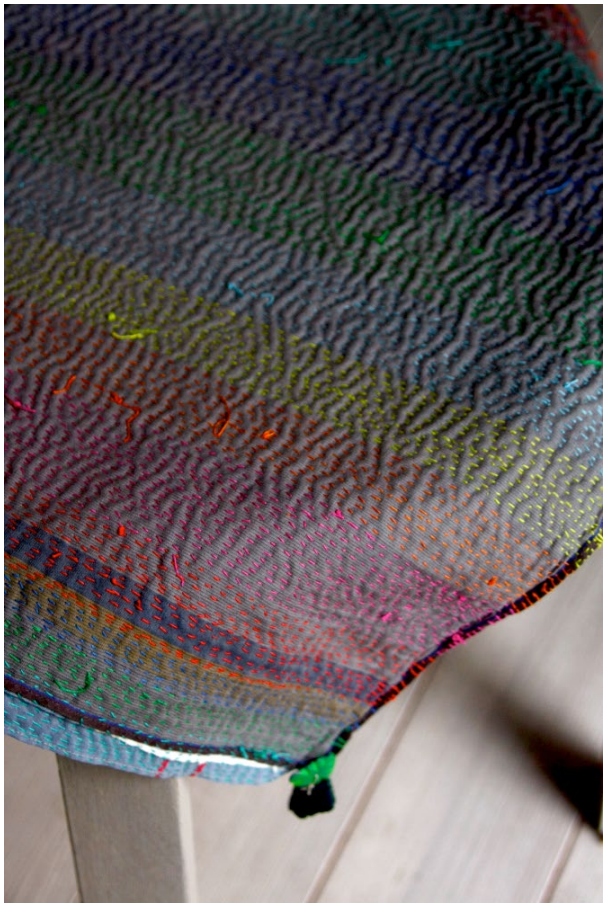
Kさんはキルトをしている時は、ある種瞑想に近い感じがするとおっしゃっていたが、今のところそんな静けさは私にはない。

ゆっくり、ゆったりとネ……、もうひとりの自分に窘められるのだが、逸る気持ちが抑えられない。

全面にステッチが埋まるまでのあいだ、ハンカチーフそのものをじいーっと見ることになる。今刺しているのは、ブルーグレーの細かなストライプのウンガロ製。よく見ると目を射るようなウルトラマリーンの極細のラインが四隅を縁取っている。さりげないこのラインが利いている。

もう片面に使用したハンカチーフは、アラビア風のプリント地にチロリアンテープの刺繍が施されたユニークな仕上がり。アラベスクとチロリアン、二つの個性をうまく取り入れて上品にまとめている。ハンカチーフの世界もおもしろいと感心している。

ハンカチーフも端切れも、使いきれないほどたくさんある。しばし途切れることはあっても、この先も続けているのだと思う。



イスにかけたラリーキルト　　撮影：加藤文子

〈薫風颯々19〉

未知のコロナに翻弄されて

神村ふじを

安倍総理が全国の小中高へ休業要請したのが2月27日、翌週の3月2日から全国の学校が春休みまで臨時休業に入った。あまりに唐突な休業要請に戸惑うばかりであった。

予定していた学習が終わらない。卒業式はどうするのか。通知表は渡せるのか。目に見えないコロナウイルスの影響を最小限にとどめたい、子どもたちをコロナ禍から守ってやりたい一心で、暗中模索という表現しか思い浮かばないが、必死で知恵を絞りながら対応してきた。

その後、休業は延長され、大半の学校はゴールデンウイーク終了まで学校を閉じた。各都道府県の感染状況の違いから、学校の再開にはばらつきがあったが、6月にはほぼ全国の学校が教育活動を再開した模様である。

今まで経験したことのない異常な事態に学校は混乱の極みであった。「父親が長距離の運転手をしていて首都圏との往復をしているが、子どもを登校させていいのでしょうか」「姉が東京の大学に進学するので、アパートの手続きのために上京した。弟を登校させていいのでしょうか」「37・5℃まではないのですが、少し微熱があるようです。登校させていいのでしょうか」「法事のために東京から親戚が来たのですが、子どもを登校させて大丈夫でしょうか」

学校でも教育委員会でも訊(き)かれてもわからないようなことが毎日のように起こり、つらい判断の日々が続いた。まったくもって混乱の極みであった。

山形県においても6月第3週の週末から県をまたいでの移動が可能になり、さくらんぼシーズンと重なって堰(せき)を切ったように県外ナンバーが押し寄せてきた。新幹線つばさの乗車率は前週と比べて1・5倍に増えたとニュースが伝えていた。

岩手県は全国で唯一感染者ゼロだったが、7月29日に2人の感染者が出て、これで全国に感染が拡大した。岩手県では感染者が出るまでのその「0(ゼロ)」のプレッシャーたるや想像を絶するものがあったらしい。

県内の4市町村が県外からの転校生を2週間自宅待機させていたということが大きな問題になった。学校で判断するには荷が重すぎるので、教育委員会として判断したようなのだが、教育評論家の尾木直樹氏が子どもの学習する権利を奪うような暴挙であると彼のブログで問題視していた。

結果として、転校生の学習する権利よりも、コロナという危険因子から子どもたちを守るということが優先されてしまったということだろうが、差別につながるような対応が、知らず知らずのう

ちに学校・教育委員会においてなされてしまったということは、まったくもって異常の極みであり、コロナ禍が組織の良識ある判断まで蝕(むしば)んでしまったように感じたところである。

昼休みはＴＶの「ひるおび」を見るのが習慣になっており、北朝鮮が開城(ケソン)の南北共同連絡事務所を爆破するまでは毎日コロナ一色であった。コロナによる社会的な制限が緩んできたこともあり、北朝鮮のニュースは妙に新鮮に聞こえた。やったことは新鮮とはほど遠い不毛の一語に尽きるが、コロナでうんざりしていたので、フレッシュなニュースソースと感じたのであろう。

その後、河井克行、案里容疑者による広島県の首長、県議、市町議員への買収疑惑と続いて、ニュースそのものは外の報道番組でも扱っていたので、新鮮味はなかったが、「ひるおび」で扱うことで、ようやく本来の「ひるおび」らしさが戻ってきたような気分になった。中には頭を丸めた首長もいて、坊主になるくらいならいっそのこと寺の住職にでもなってほしいと思ったものだ。

夢と希望に満ちた未来を創る政治であるべきなのに、選挙権が18歳まで下りてきて、政治というものが中高生にまですり寄ってきているのに、また、彼らにとっても極々身近なものでなければならない政治であるはずなのに、この様(ざま)はいったい何だと声を上げて言いたい。

学校は、臨時休業が長引いたため、7月いっぱいは登校しての授業となったが、学校は8月からようやく夏休みに入る。文部科学省では今年度プールを使用しての授業は行わないよう全国に通知した。せめて町の社会体育施設のプールは何とか開放してやりたいと思っていたが、どうしても3

密を回避することができないという理由から、町のプールも開放を断念するほかなかった。水遊びに夢中になる子どもたちの姿が目に浮かんで申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

アベノマスク、ソーシャル・ディスタンス、ウィズコロナ、アフターコロナ、GO TO TRAVEL、新生活様式。コロナ関連で浮上してきた言葉が思いつくだけでもこんなにある。毎日目まぐるしく変わる国や県の対応、コロナに翻弄される日々はまだまだ続く。

対詠　ごきげんいかが？　PART 75　〈2020〉

O　小野澤繁雄
N　布宮　慈子
K　河村　郁子

クリニックはドアが開(あ)いててすぎんとし咳する声がみちにひびくも　6月29日　O

Jリーグ無観客にて再開すピッチに響く選手らの声　7月5日　N

コロナ場所砂被りには熱気なく力士が回しをたたく音響く　7月6日　K

公園につどうことにも慣れたよう若い人その声をたのしむ　7月9日　O

姉御肌だつたあなたはもう居ないその情熱をわれは忘れず　追悼・和田みさ子さん　7月13日　N

これよりは「岡井隆全歌集」を尊師と仰ぎ詠みつぎゆかな　7月16日　K

緊張を車内にもちて県またぎ君のところで蚊に食われおり　7月21日　O

マスクしてゐない人はあなただけ遺影にふかく頭を垂れて　追悼・和田みさ子さん(2)　7月26日　N

蟄居にて日本三百名山つぎつぎ登攀す　4Kテレビ　7月31日　K

百穴をひゃっけつと云う人もいて百にとどかぬ穴の入口　8月3日　O

百歳に四つと迫る勢ひをもちて果敢に先生は生きた　7・30外山滋比古先生、逝く　8月10日　N

的確にご指導いただき25階ドリンクバーは外山先生　8月18日　K

祖父たちの「戦友会」に入会し戦争をしりたきしりぬ　若きら　8月22日　O

若きらはオンライン授業に慣れゆくか親戚の子はキャンパスに行かず　8月29日　N

オンライン授業受けたし老い人のかそけき望み　そは知識欲　9月1日　K

桂の木木下にあれば滴して昨夜の雨を忘れおりしか　9月6日　O

アランフェス協奏曲をハープにて聴きたる夜の道の霧雨　9月12日　N

師と訪(と)ひし聖トーマス教会を思ひつつ聴く「マタイ受難曲」　9月20日　K

前号作品短評A〈小野澤〉

●始まりは演奏会に行くときの帽子つくらむと思ひしことなり　布宮慈子

一連タイトルは「ベレー帽」。その始まりの歌。一連から、演奏会は山形交響楽団のもの。会は中止で、ネット配信になったようだ。マスク手づくりはこの間よく聞いたが、ここでは帽子、それもフェルト帽。歌からは、ネットで生地を求め、たぶんミシンもつかう。

モスグリーンのものができた。出来映えも「なかなかである」（四首目）。

家の中で帽子かぶつて山響の演奏聴きぬマスクはせずに

こんな歌になった。当然に窮屈な感じがある。滑稽味もある。結句、マスクはせずに、も含めて今がある。先が不透明で、先のことは「誰も知らない」（九首目）。今は続いている。

一連の家居のなかで、つまりは何かして（ここでは手仕事）しのいでいるなかで、それでも詠うことはしている。「涙にじみ来　日常は遠し」（七首目）、ここから、

縫ふことは祈りに似たりミシン踏むたびにことばが生まれては消ゆ

読み手も作者の時間の近くにいる。

●風はやも春の気配にかわりつつ街の彼方に夕焼赤し　市川茂子

春風という言葉があるように、風から変わってくるような感じはある。風には風向きもある。身体の感覚として気配。その覚知は待っていればことにはやいものだろう。

そのうえに春は他所からやってくるような感じがある。作者は街住まい。したがって街の彼方をみてしまう。気配に、と彼方に、の、に、に出ている順接感と逆接感。夕焼赤し、はいつものようでいつもでない。説明しようとすると言葉がいるが、歌はそのとおりのもの。

との曇る早春の山かすかにも芽吹きのきざし風の音きく

前の歌で、箱根路の旅に出ている、そこでの歌か。山を見ている山の中、そこでもみるもの、聞くものがある。この歌も何も説明がいらないようなそのとおりの感じがある。そこがいい。

街路樹の根元うずめてとりどりにつつじ咲きつぐ街の静もり

咲きつぐ。時間か、場所の連続感か。つつじの色彩は仕方のないものでもある。眼に入ってくる。結句、街の静もり、は今の街の状態だろうか。「災害に登山電車は横たわり」が他の歌にあるが、この歌を含むうしろ三首をコロナ感染の渦中の歌と読んだ。

●春浅き朝の寝ぼけまなこにて新聞受けまでスロープ下る　河村郁子

これは一連「放置自転車」のさいしょの歌。春の早朝に塀にもたせかけた自転車を見つけたことから始まった撤去されるまでの事件というか、その顛末がドキュメント風につづられた。簡単にすまないやりとりが、五回目までつづく。最終的に（六日後に）撤去されるまでの顛末である。

面白い。というか淡々と事実がつづられたことで、作者のつどの口吻（こうふん）は抑えられているものの、おのずとにじむ。途中の歌、これらが三回目と四回目のやりとりになる。

区役所の電話番号教へられ詳細語れば「担当は支所…」

支所にても状況話せば「引き取りは問合せセンターに依頼せよ」

おもわず改めて、たらい回し、を辞書にみることになった。元々は、「足で、盥を回す曲芸」とある（『新明解国語辞典』第五版）要は、見世物なのだ。

前号作品短評B〈慈子〉

●水かえをするのみなれどチューリップ室に花あることのうれしさ　小野澤繁雄

よくわかる歌である。「チューリップ」でいったん切れる。「室」は「へや」と読ませるのだろう。二首目は少し難しい。

チューリップでまだあるようないただきしそれも稀なる花を室置き

ぎりぎりチューリップといえるような、頂戴した（花）、それも非常に珍しい花を部屋置きにしている。ことばの並びは詩のようでもある。

チューリップについて調べてみた。「外観は、花弁の先端が丸いもの・尖ったもの・フリル状のものもある。咲き方は一重から八重で、一つの球根から複数の花がつくもの、すぼまった状態で開花するものや花弁が外側へ反り返り全開して開花するものなど。花色も青以外の赤・黄・オレンジ・白・緑・紫などの単色や複数の色のものなど、数百品種のチューリップが存在する。青バラと同様に多くの育種家によって青いチューリップの開発が進められているが、花弁全体が青い品種は発表されていない」（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より）。チューリップの種類は多く、十七世紀のはじめごろオランダでチューリップ取引が行われ、「チューリップ相場」という言葉まであったということだ。日本での栽培は、富山県と新潟県がほとんどを占めて

いる。

母の家の片づけごとにきているに何のはずみか学帽飾る

作者の実家の片づけは遠距離ということもあり、まだ続いているようである。

●目印を辿れば奈落蝶の昼　　新野祐子

季語は「蝶の昼」で春、とのことだが、その意味するところが今ひとつつかめない。毎日一句を取り上げて鑑賞していた清水哲雄さんのインターネットサイト「新・増殖する俳句歳時記」（二〇一六年八月八日で終了。なお「新」となってからは清水さんのほかに何人かが参加し、曜日ごとに担当）より引用する。

そこまでが少し先まで蝶の昼　　深見けん二

（略）掲句は「蝶の昼」という華やかな季題によって、舞い遊ぶ蝶に「そこまで」の用事を一歩もう一歩と誘導されているようだ。しかし、浦島太郎よろしく「ああ、こんなところまで」と詠嘆の大時代的なもの言いでないところが、現実の静かな実感である。しかし「少し先」には、いつもの「そこまで」とはわずかに違う、ささやかな甘い余韻が漂う。隣りに並ぶ〈蝶に会ひ人に会ひ又蝶に会ふ〉では、掲句よりさらに先まで、めくるめく感覚に歩を進める。次元の裂け目に移ろうように、ひらひらと心もとなく舞う蝶を寄り代にして、現実をまぼろしのように見せ、危うく美しい無限世界を描いている。『蝶に会ふ』（2009）所収。（March 17 2009　土肥あき子）

やはり、蝶に惑わされるように目印を辿って行ってみるとそこは奈落であった、と解釈できる。明るいところから暗転するような怖さを表現している。

いま芽吹く撫はますらお触れてみる

「葉山山行三句」の最後の句。雪が消え、新芽が出はじめたブナは「ますらお」だという。ますらおは雄々しく強い男のこと。みずみずしく、樹皮が滑らかなブナにそっと「触れてみる」行為はエロティシズムを感じさせる。なお、撫（ぶな）は季語にあらず、「芽吹く」が季語である。

無二の会短信

◆六月二十一日の午後四時頃から六時頃の間に、部分日食の天体ショーがあると報道された。見落とすと三年後の四月になる。この日を逃すと次は見られないと思って、金環食の時に用意した観察用のメガネを出して待っていた。当日になって外に出たら、厚い雲に覆われて、視界には日の影も形もなく残念だった。最近になってもっと残念なことは、東京でのオリンピックが延期になってテレビで見られなかったことである。歳月の流れとともに、残された時間が少なくなってきたので、あれもこれもと思いながら欲張りになったようだ。　市川茂子

◆ベランダは共有部分（避難路になります）なので、花なども置けませんが、子どもが小学校の頃は、持ち帰った鉢を置いていました。水やりをしますが、そのうち先祖帰りして、野菜のようになっていました。何かの折、いただいたりした花を室置きしましたが、今は、散歩途中に庭や畑の花をみます。畑といっても菜園ですね。畑で花を楽しんでいる人も多い。町内を庭のようにしているので、庭や畑に出ている人とも話をします。そんなことが一日の何か大事なことになっています。　小野澤繁雄

◆最上川が五十数年ぶりに氾濫した。私が住んでいる左沢（あてらざわ）の様子が全国ニュースで流された。河北町や大石田町、村山市も甚大な被害をこうむった。左沢の氾濫地点は自宅からわずか数百メートルの地点で同じ町内会であった。災害ボランティアの方々の動きは早かった。地元の高校生、他市町あるいは他県からもまとまっておいでいただいた。コロナに浸水被害、嘆いていてもしょうがない。まもなくお盆である。　神村ふじを

◆令和元年十一月に生まれた甥の長男の曾祖母の代理をしている。同年三月に逝った五歳上の姉の代役である。この役どころをとても気に入っている。令和二年に入ってからのコロナウイルスによる地球全体の閉塞感の中で、新しい命のすくすくと育っていく様子に救われている。ポストコロナの新しい時代に堂々と対処してゆく姿を祈るばかりである。長生きしたいものである。　河村郁子

◆毎朝読んでいる『一日一文』が残り半分を切った。今日七月二十六日のページにはイギリスの作家バーナード・ショウの言葉が。「生に関する技術では、人間は、何物も発見しませんが、死に関する技術では自然を凌駕して、化学や機械の力で、悪疫、流行病、飢饉というような、あらゆる殺戮を行っています」。新型ウイルスの出現と蔓延、未曾有の豪雨などなど、人間が自然を壊してきた結果だろう。日々旺盛な生命力で伸びる草を刈りながら、自然に対してもっともっと謙虚であら

ねばと思う。

新野祐子

◆新型コロナウイルスのせいで、いつも借りている文京区の施設が閉鎖されるなどしたこともあり、第189回～192回の清紫会は休みにした。だが最近、三密（密閉空間、密集場所、密接場面）を避けられるなら、施設を使っても良い、ということになった。そこで七月から集会を始めようかと思ったところ、ここにきて感染が拡大しはじめ、感染の第二波が始まったのではないか、との声もある。今後どうしたものかと迷っているところである。

松井淑子

◆北海道にようやく夏がやってきた。関東の梅雨明けと同時に、札幌は夏日になった。レースフラワーが自生する砂利の駐車場で空を仰ぐ。（モンゴルにいたときも、苫小牧にいたときも、いつも、こうやって、空の青さを見つめていたな）と心でつぶやく。コロナ禍にありながらも、私の日常は幸いにして大きな変化はない。手指消毒、洗顔、鼻うがいなどいくつかの工程が増えはしたが、支援を必要とするところへ支援をしに行く日々を重ねている。見つめる空は、私の心情を色濃く跳ね返してくる。モンゴルの空は、見上げるたびに切なく感じられた。苫小牧の空は、その広さに日々圧倒された。札幌の空は、私に健やかさをもたらしてくれる。心が晴れやかになったね、と、空が笑う。

山内裕子

編集後記

◆七月二十八日の大雨により、最上川の流域各地で大きな被害があった。実家のある河北町谷地（かほくちょうやち）でも堤防の決壊は免れたものの、川近くの集落では数十軒で床下や床上浸水があった。空き家になっている実家は大丈夫だった。数日すると被害の大きさがわかってくる。畑が全滅とか、サクランボの木が倒れた等々。ずっと下流の大石田町では川が決壊した。最上川流域の大きな被害は五十年ぶりだとか。人的な被害がなかったことは幸いだった。山形県では新型コロナに加えて、水害があり、八月に入ると三十五度を超える猛暑日があるという過酷な夏だった。県民には「山形は災害が少ない」という、妙な思い込みがあった。しかし、まじないほどにも当てにはならなかった。これからは気を引き締めていくしかないだろう。

◆次は百号。休んでいる人にも、次回はぜひ作品を出してほしいと考えている。

◆外山滋比古先生がお亡くなりになった。享年九十六。わたしたちは二〇〇四年から始まった外山滋比古先生を囲むエッセイ教室「清紫会」でずいぶんと親しくさせていただいた。はじまりは著者と編集者との関係からである。長年お付き合いのあった著者としての外山先生と編集者・布宮みつこ（「展景」の元主宰者、故人。慈子の叔母）は、わりに何でも話せる間柄になっていた。五歳年長の先生を尊敬しながら、親しみを感じていたようだ。みつこは短歌のほか、友人と交互にエッセイを書いて冊子にまとめたりしていた。あるとき先生にエッセイについて相談したら、「歌人や俳人は文章が下手だから、勉強しよう」となったのだ。「清紫会」という名前も先生が付けてくださったものである。先生を口説いて先鞭をつけたのはみつこだったが、月に一回開く会の運営すべてを任されたのは松井淑子さんだ。二〇〇五年に布宮みつこが急逝してからも、会をスムーズに開いてこれたのは松井さんのおかげである。

十人に満たない参加者だったが、先生はエッセイを読んでそれぞれ評をしてくださった。「とにかく書き出してみる。それを数日とか時間をおいて眺めてみること」「おしゃべりする場もたいせつ」。会が終わったあとは毎回、食事をご一緒した。博覧強記というのは外山先生のような人のことだろう。気さくな方でもあった。話題が豊富でおもしろく、本当にぜいたくな場であった。さらに引き際は見事だった。先生が八十五歳になったころだろうか、「自分はこれで終わりにするが、会はみんなで続けていってください」「あとになってみれば、あのとき区切りをつけてよかったと思うはずです」と言われた。寂しくもあったが、受け入れるしかない。わたし自身は仕事で毎月出席とはいかず熱心な生徒とはいえなかったが、なんとかやり繰りして出ようとしていた。いま考えれば、清紫会で先生と過ごさせていただいたのは珠玉のような時間。それを胸に刻んで、これからも怯（ひる）むことなく書いていこうと思う。

清紫会で教えてくださった外山先生に改めて感謝申し上げるとともに、ご冥福をお祈りいたします。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 99号
二〇二〇年九月二十五日　発行
編集・発行人　布宮慈子
制作　スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright © 2020 MUNINOKAI. All rights reserved.